



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	宮沢賢治 像の生成と受容の変遷をめぐる文化研究(論文要旨)
Author(s)	構,大樹
Citation	
Issue Date	2017-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2309/147694
Publisher	
Rights	

氏 名 : 構 大樹
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第291号
学位授与年月日 : 平成29年3月23日
学位授与の要件 : 学位規則第4条第1項該当 課程博士
学位論文名 : 〈宮沢賢治〉像の生成と受容の変遷をめぐる文化研究
論文審査委員 : (主査) 教授 一柳 廣孝
(副査) 教授 井上 果子 教授 千田 洋幸
教授 佐藤 宗子 教授 高木 まさき

学位論文要旨

本論では、〈宮沢賢治〉の生成と受容の変遷を論じるなかで、なぜ読み継がれてきたのかを文化的・社会的状況から歴史的に意味づけた。

生前期 (一九二四～一九三三) の賢治は『春と修羅』の出版、『銅鑼』での作品発表によって、革新的な表現を用いる新進詩人〈宮沢賢治〉として、若手を主とする一部の詩人から期待を寄せられていた。(第一・三章)。このような詩人としての出発時に抱かれた期待は、賢治が作品発表を中断しても、なお途切れることはなかった(第二章)。

賢治追悼期 (一九三三～一九三五) になると、生前期の〈宮沢賢治〉に抱かれた期待が、同時代的な文学場の言説で言い直された。賢治が優れた作家であったこと語るべく、文学場の今・この問題における損失としてアピールすることが目指されたためである。その際に用いられたのは、文芸復興期の文学場における、作家の生活を文学テキストの価値に組み入れる評価であった。この肯定的な評価が、〈宮沢賢治〉の語り方を転換させ、“生活”を前提とする〈宮沢賢治〉の評価方法を確立させたのである(第三章)。

戦時下の〈宮沢賢治〉の語り方にも、基本的には追悼期に確立した方法が引き継がれた。当時の文学場は、「素人の創作」に特権的な文学的価値が付与される言説が編成されていた。と同時に、「素人の創作」は素朴・誠実さが評価軸として機能したことで、本来は公表される予定のなかったテキストに、文学的価値を見出す動きもあった。こうした“素人性”、“私事性”という文学的価値は、〈宮沢賢治〉の価値を高揚させた。初期受容において戦時下は、以上の要因から〈宮沢賢治〉の高揚期 (一九三八～一九四五) が立ち現れたのである(第四章)。さらに、こうした価値の高揚は、満州開拓青年義勇隊の教科書への「雨ニモマケズ」採用を生じさせた(第五章)。

戦後、〈宮沢賢治〉は学校教育場の言説空間に引き入れられ、小・中・高等学校の国定国語教科書で賢治テキストの教材化が行われた。潜在的な享受者を、なかば強制的であったとしても拡大させる教材化という現象の始まりは、賢治受容の定着と広域化を生じさせた。この教材化の機能は、現在に至るまで持続している。

終戦直後、賢治テキストが教材化された理由としては、戦時下においてすでに、青年教育に資

する教育的価値が認められていたことが挙げられる。戦時下における〈宮沢賢治〉の教育的価値とは、国体イデオロギーの周縁で生じていた。このことは、児童文化の領域でも見出すことができる（第六章）。こうした言説編成が戦後、逼迫した時間のなかで、過去の文学的遺産から今・ここに適う教材となるテキストが探されたとき、賢治テキストを目にとまりやすい位相に置いたと考えられる。

加えて、戦時下における〈宮沢賢治〉の教育的価値をめぐる言説編成は、戦後の教師に対する利点を生じさせることになった。〈宮沢賢治〉の教育的価値は国体イデオロギーの周縁で生じており、よってあたかも以前から認めていたと語ることは、戦中・戦後の一貫性を示す自己弁護となり得た。また国定教科書での教材化も行われていたことから、戦後民主主義を中心とした言説空間のなかでの信頼性を帯びていた。ここにおいて、戦後に〈宮沢賢治〉を語ることには、信頼性と安心感が生じていたと考えられる。ゆえに、それが一つの起因となって、〈宮沢賢治〉は戦後教育のなかに溶け込んでいったのである（第七章）。

けれども国語教育においては一九六〇年代後半に、「大きな物語」の後景化を受け、学習者が理想的な社会集団の成員となるよう「主体変革」を促すという教育理念が衰微し、学習者の技術・能力の向上に資する教育が重要度を増すことになった。それにもかかわらず、「雨ニモマケズ」を前提に教育的価値が生じた〈宮沢賢治〉が依然として学校教育場に受け入れられたのは、賢治テキストに能力主義的な教育観との重なりが発見されたためであった。このことは、「やまなし」をめぐる言説よりはっきりと浮上する（第八章）。

その一方で、ポピュラーカルチャーの領域に目を移すと、一九八〇年代から「雨ニモマケズ」を中心とする〈宮沢賢治〉から距離のあるイメージ生成が見受けられる。そうした生成は「大きな物語」の後景化と、『校本全集』以降に賢治テキスト群の整備に促されたと考えられる。けれども、東日本大震災以後、ふたたび〈宮沢賢治〉は倫理性を強めている。「絆」「つながり」がキーワードとなる言説空間が立ち現れたためである。この動きは、歴史的には〈宮沢賢治〉の拡張に対する揺れ戻しとして位置づけられる。この揺れ戻しを生じさせたのも、学校教育場が長期間〈宮沢賢治〉を教材として取り扱ってきたためであろう。公式的な〈宮沢賢治〉の再生産と、それともなう公共性の付与が、そうした受容の再帰を容易にしているのである（第九～十二章）。